

[資料紹介]

ジェームズ館の寄付者、ジェームズ夫人——

Ellen Stebbins Curtiss James の業績・人となり・肖像

坂 本 清 音

はじめに

栄光館の西に立つジェームズ館は、今や同志社女子部の構内で一番古いレンガ作りの建造物となった。1912年竣工、1914年落成であり、女子部構内では2000年に栄光館と共に「登録有形文化財」の指定を受けた。

その寄付者であるジェームズ夫人とアーサー・ジェームズ氏に関しては、



D.W.James 夫妻

from the Collection of Madison Public Library, Madison, New Jersey

ジェームズ一家が慈善家 (philanthropist) であったこと、送られてきた金額10万ドルは女子部への寄付としては最高額であり、しかも、ちょうど同志社女学校が専門学校設立の許可を文部省に申請するに際し、不可欠の校舎建築を計画中であったので、どれほど委員を驚かせ、かつ勇気づける力になったかについては『同志社女学校期報』の記事などを通して、よく語り継がれてきた。

しかしながら、張本人のジェームズ夫人については、生没年はおろか、人物像 (外形も内面も) について何も明らかにされないまま年月がたち、今日に至っていた。それが今年に入って、二人のアーキビスト^{注1}のおかげで、肖像画が見つかり、人となりについても貴重な資料が見つかった。資料紹介の形でここに掲載できることを、兩人に心から感謝したい。

なお本紹介では、女性であるが故に、これまで一社会人として扱われることの少なかった Ellen Stebbins Curtiss James の業績と人なりに焦点を当てて、纏めることを試みる。

[I] これまでに知られていた記録の整理

本題に入る前に、まず、これまでの資料で明らかにされていたジェームズ夫人と女子部との関係を纏めておく。

新平安寮新築と教師館移転のために

ジェームズ夫人が『同志社女学校期報』(以後『期報』と略記)に最初に出てくるのは、28号(1910年4月)の「校舎移転寄宿舎新築」の記事の中である。

◎ 寄附申込 七月二十七日突然米國ニウヨーク市の校友アーサー、シー、ジェームス氏の母堂より飛電あり。教師館移転及寄宿舎新築

の資本を供給せんとするの申込あり。爲に當時東京に在りし原田校長も急遽歸京せられ、早速凝議を盡して、工事に着手するの運に決し、工事委員中安藤乙三郎氏は専ら其設計及監督の任に當らるゝ事となれり。(『期報』28, p.11 下線坂本)

この記事では、「アーサー・シー・ジェームズ氏の母堂」という形でジェームズ夫人が紹介されており、夫人の配偶者の名前も、もちろん本人の名前も書かれていない。また、だれが寄付を依頼したかには言及されていないが、クラブは『ミス・デントン——「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年』(以後『ミス・デントン』と略記)^{注2}の中で、「恐らく彼ら[ジェームズ母子]の同志社への最初の贈り物はウィリス・ジェームズ夫人が1909年にミス・デントンに送った古い木造建築を再建するための寄付金であった」(p.106)と書いていることから、デントン絡みであったと想像される。

古い木造建築の再建というのは、女学校最初の校舎(ウーマンズ・ボード)^{注3}がアメリカ独立百周年募金の中の6000ドルを、京都のJapan Homeのためにと献金をして、建った校舎)が築30年たち、かなり傷んでいた。今度は、ミス・デントンが太平洋ウーマンズ・ボードに訴えて、4万円強の募金を得て、女子部で最初のレンガ造りの校舎が建つことになった。そこで、最初の校舎の木材を出来るだけ活用して、初めての独立した寄宿舎を建てることになったのである。それまでの女学校の寄宿舎は全て教室棟と一つになっており、2階部分が寮という形で始まっていた。

このとき新築される寄宿舎は、「このようなタイプの西洋の寮の最上の特色と日本の学生のための建物の最上の特色を兼ね備えた新しい寮」(『ミス・デントン』p.106)となった。名前は「平安寮」であるが、もともとの校舎の中の寮部分(西側のウイング)も、すでに平安寮と名付けられていたので、当座は「新平安寮」と呼ばれた。同志社女学校の中で最古の、最初の寮の特色を残す、伝統的な寮であった。

この記事の中には、送られて来た金額についての記述はないが、同じ時に、全国の校友同窓宛てに発送された案内状の中で、「今般義侠なる米國一淑女よりまず寄宿舍移轉費として金數千圓の寄附申出有之候」（『期報』28, p.11 下線坂本）とあるので、この折は数千円であったことが分かる。同号32ページでも、中瀬古教頭が「今般此清楚なる新寄宿舍を見るに至りしは、米國紐育に住せる一富豪家ゼームス夫人が篤志によりて数千圓の金を送られしによる云々と披露せらる」と書いているので、このときの金額は数千円と確定していいだろう。

『ミス・デントン』の中には、これと関連して、ジェームズ夫人の秘書〔カルマン氏〕からの別の書簡が紹介されている。それによると、夫人が新しい寮舎の建築状況を知って喜ばれていることと、夫人の依頼で、諸設備を購入する費用のために、「追加費用として1500ドルを同封する」（p.107）とあるので、新平安寮建築と関連しては、最初の数千ドル（1円＝約1ドルと換算）と1500ドルが、ジェームズ夫人からの寄付ということになる。この追加の金額は、翌1910年に旧校舎の東側のウイングを再利用して教師館（後にデントン・ハウスとして有名になる）を建てる際にも使われた。

この合計金額は結局、9720円54銭になったことが、『同志社五十年史』（同志社校友会 1930年）の中で明らかにされている。（p.409）

女学校の高等教育充実のために

そして次の送金が、『期報』30号（1911年8月）の最後のページに追加記事として登場する NEGRABAS（「金拾万弗來月送金スベシ」）の暗号電文である。しかも、その電報が届いたのは、「明治四十四年八月十七日女學校内に於て建築委員會開會中午前十時卅分」のことであった。

之を落手したる委員等の驚愕と歡喜とは、實に言語に絶するものあ

り。直に感謝會を開きて天佑の益優渥なるを謝し校運の益隆盛ならんことを熱心祈願せり。(『期報』30 追加記事 p.3)

と、その感激を報じている。

次号31号(1911年12月)においても、「学報」欄でそのことは更に詳しく記述される。

越へて十月二十日に至り、九月二十一日附紐育發、ジェームス未亡人及同子息アーサー氏兩人署名の寄附金趣意書は原田校長中瀬古教頭デントン教師三名宛にて到着し中に倫敦ブラウン、シップリー會社の爲替手形額面金貳萬七百壹磅拾五志拾片を封入せられたり。同志社に於ては直に之を神戸香上銀行に於て商議したるに、二志八分五の爲替相場に因りて邦貨金貳拾萬壺千七百六拾參圓六拾六錢を實収することを得たり。

本寄附金の用途は約半額を以て教員俸給、實驗費、圖書費等の永久資本となし、殘額を以て女子大學部の校堂及公会堂の建築費となすにありと云ふ。(『期報』31 p.5 下線坂本)

と、10万ドルは当時の日本円に直すと、201,763円66銭になったことと、そのうちの約半額は女学校の永久資本として残し、残りの10万円が建築費(校舎及び公会堂)に回されることになったことが分かる。この場合の公会堂が、後に静和館とジェームズ館の間に立つ「栄光館」をどの程度イメージされていたかは判断できないが、この頃から女子部の中心となる公会堂がいずれ必要と考えられていたことを示していると言える。

それと、10万ドルの寄付というのは、英学校のハリス理化学館への寄付と同額であり、1回の女子部への寄付金としては最高であることは記憶に留めておく必要があるだろう。

10万ドルはジェームズ夫人と息子アーサー連名で

ここで注目したいのは、この時の10万ドルの寄付金がジェームズ夫人と息子アーサー兩人によるものだという点である。『期報』35号（1914年2月）の「専門學部新講堂定礎式」の報告記事でも、原田社長に代わって「式辭及工事由來朗讀」の役を果たした西尾幸太郎は「同志社女學校専門部擴張の議あるや米國紐育市素封家ウィリス・デー・ジェームズ夫人並にアーサー・シー・ジェームズ氏等米貨十萬弗を寄贈し以て是を援けらる」（「建築工事の由來」p.9 下線坂本）と述べている。

そして寄付金の用途に関する寄贈者の希望は、額の半分は基本財産とし、残りの半分を校舎拡築に充てることであつたので、まず金55,000ドルを同志社女学校の基本財産とした後に、

隣地千六百十二坪二七を買収して新築校舎の敷地とせり茲に於てか京都高等工藝學校教授武田伍一（ママ）氏に托して校舎の設計畫案を作らしめ別紙圖面及仕様書を得たり（p.10）

と、建築費には土地代も含まれていたこと、この時点で、静和館同様、武田五一京都工芸學校教授に設計を依頼したことが明記されている。この「由來」はさらに続けて

即ち之を東京清水滿之助京都出張所に附し以て建築費を見積らしめ折衝を重ねつゝありし際、大正二年九月二十六日ジェームズ夫人は電音を以て校舎の規模増大を望み更らに米貨六千弗を寄贈せらる（p.10 下線坂本）

と報告された。先の10万ドルの寄付の2年後のことである。

ジェームズ館の両翼のため

上記の記述では、追加の6000ドルが「校舎の規模増大を望み」とあるだけで、具体的な事情は分からない。これに関して、『ミス・デントン』の中では、以下の説明記事が掲載されている。

建設費は突然、劇的に高騰した。それで、総経費のうち新しいジェームズ館に充てられる六千ドルが不足するという事態が明らかになった。そこで北に延びている両ウイングを切り取って建設することが提案された。この事情をジェームズ夫人に報告した結果、カルマン氏から一九一三年九月二四日付の次のような返事が返ってきた。

「資金不足のために新しい建物の二つのウイング（翼）が切断されることはなんとも悲しいことです。今朝、電報で両翼をそのまま維持することが許されましたことをお知らせできて、非常に嬉しく思います。そしてこの手紙が届きます前に、二つの翼が生えていることを確信しております。

この愉快的説明に対する答えは次のようなものです。すなわち、ジェームズ夫人は提案されている建物の翼に、必要な六千ドルを追加して贈与する決心をなさいました。それで私は上記に述べた金額と同等の小切手を同封いたします」(p.108 下線坂本)

新しい建物から翼が切り取られるかも知れないとの、ミス・デントンの報告を聞いて、ジェームズ夫人は即座に6,000ドルの追加贈与を決めたのである。現在のジェームズ館の、両翼の着いたバランスの取れた姿を見るときに、ジェームズ夫人の建物に対する美意識（詳しくは後述）と、寛大な寄付金に対して、一層の感謝を感じずにはいられない。

ジェームズ館という名前

後述するように、ジェームズ一家の寄付金の出し方は「匿名で」が、基本姿勢であった。それ故に、同志社女学校の場合も、新講堂の名前を「ジェームズ館」(James Hall) としたい旨の問い合わせに対し、秘書のカルマン氏を通して以下のような返事があった。

もしもそうしたいとおっしゃるならば、全くご自由にその建物を「ジェームズ館」と呼んでくださって結構です。もっとも学校に関わる全ての人が、建物のひとつにその名前をつけたいと心から望まない限り、必要はないということを、あなた方に知っておいていただきたいのです。(『ミス・デントン』 p.108)

専門学部専用の寮と校地拡張のために

さて、その後もう一度、ジェームズ夫人からの寄付があったことは、女学校の歴史の中で、あまり触れられていない。再び『ミス・デントン』によると、さらにその翌1914年に、デントンはジェームズ夫人にまた寄付の要請をしていることが分かる。次の書簡はジェームズ夫人の秘書カルマン氏からのものである。

一〇月五日付お手紙は滞りなく着きました。私は問題は考慮中であると言って来ました。私の最初の強い思いは女学校のために、大変必要とされている寮を追加建築するための資金を送金することでした。それで最終的にそうすることに決めたのです。私は横浜正金銀行に一万ドルの小切手を送ります。このお金はD・ウィリス・ジェームズ夫人からだけのものです。実際最近、女学校に送られた贈り物はすべてD・ウィリス・ジェームズ夫人からのもので、あなた方がこれらの贈り物とアーサー・ジェームズ氏が関与している大学への贈り物とを混

同なさらないようにお願いします。(p.108 下線坂本)

以上の説明から、ジェームズ館建築のための10万ドルは、確かにジェームズ夫人とその子息アーサー・ジェームズ氏からの寄付であるが、その後送られた6000ドルおよび、この1万ドルは、ジェームズ夫人からだけのものであるということ、カルマン氏は強調したかったことが分かる。カルマン氏のジェームズ夫人観は、後に触れる。

この寮の追加建築とは、専門学部の充実と大いに関係がある。すなわち、1912年に専門学校令によって正式に発足した同志社女学校の高等教育は、その後に生徒数の増加が見込まれ、寮の収容力も一層の拡大が必要となった。

そこで、1915年には「新島寮」の東にあった「家政館」(教室と寮の併用)に増築する形で、専門学部専用の新寮が建設されることになった。名前は町名の常盤井殿町に因んで「常盤寮」と名付けられた^{注4}。

この寮に関しては、同志社女学校拡張準備委員であった松田道が『期報』38号(1916年3月)に寄稿しているエッセイ「近頃の感想」の中で、言及している。すなわち、明治44年2月より大正5年1月に至る同志社女学校の主たる新築校舎の3番目に「常盤寮」を挙げている。(もちろん第1は静和館、第2はジェームズ館)

三. 大正四年四月専門學部寄宿舎を増築し旧寄宿舎を連結し是を常盤寮と總稱す、且つ同寄宿舎の前面五百坪を平安義会より借入れれを庭園となせり(『期報』38 p.41)

この資金の出所には触れていないが、『ミス・デントン』(p.109)より、ジェームズ夫人の寄付1万円がこの寮の建築費となっていることが跡付けられる。前に引用した書簡の後半部で、カルマン氏は、デントンが具体的

に図面をつけて要請している内容を受けて、新しい寮の建設費は5,000ドルか6,000ドルと推察するので、あなたが3,500ドルで購入できるという土地をぜひとも買っておくようにとアドバイスしている。^{注5}

ジェームズ夫人からの寄付総額

以上、秘書のカルマン氏からの書簡を手がかりに、ジェームズ夫人からの寄付金の流れを概観した。それによって、ここに夫人からの寄付総額を纏めておく。

まず ①女学校最初の校舎の木材を出来るだけ利用した上での、平安寮とデントンハウス新築のための数千ドルと追加の1500ドル（『同志社五十年史』により9720円54銭と計算）、②ジェームズ館のための土地購入および建設費を含む同志社女学校の高等教育充実資金として、息子と連名での寄付10万ドル（一応半額の5万ドルと計算しておく）、③ジェームズ館の両翼を確保するための6000ドル、さらに、④新寮（常盤寮）の建設と周辺の土地購入のための1万ドルであり、合計すると、約73,000ドルという概算になるであろうか。^{注6}

いずれにしろ、夫人と息子の資産は、夫であり父であるD・ウィリス・ジェームズ氏の遺産から始まっていることを思うとき、同志社女子大学はジェームズ一家に大いに負っていることは間違いない。とりわけ同志社女学校の高等教育の充実発展期に、ジェームズ一家が、最も必要とされた巨額の資金を継続的に送り支持を続けたことに対する恩義を、いつまでも記憶にとどめておかねばならないだろう。D・ウィリス・ジェームズ氏及び夫人の生涯に関しては後に詳述するが、その生き方を含めて、大いに学びたい。以下のページで、これまでに知りえたことをまとめておく。なお小論では、ジェームズ夫妻（特に、インターネット等では見つからないジェームズ夫人）を詳しく扱う。子息のアーサー・ジェームズ氏は同志社大学との関わりがより深いと思うので、今回は個別には取り上げない。

[Ⅱ] ジェームズ氏夫妻^{注7}についての^{注7}新資料

1、ジェームズ氏について

生涯

Daniel Willis James (1832-1907) は、1832年4月15日英国のリバプールで生まれた。父 Daniel James はニューヨーク州出身で、アメリカの金属貿易業者 Phelps, Dodge & Company のイギリス駐在の共同経営者であった。

母 Elizabeth Woodbridge Phelps もアメリカ人で、同社社長の娘であったので、彼はイギリス育ちではあったが、幼児よりアメリカ的な気質や見解を身につけていた。13歳までは地方の寄宿学校で学び、その後エディンバラに出て高等学校に3年、エディンバラ大学で1年間学んでいた17歳のとき、母が死亡した。

父は、息子がアメリカに帰って同族企業の一員として早くビジネス界に入ることを希望していたので、大学を中退して帰国。5年以内に Phelps, Dodge & Company の若手共同経営者となって活躍した。やがて企業がアリゾナ州に持っていた銅の鉱山が成功して、鉄道を敷設したり、米国西部やメキシコにおけるパイオニア的操業に当たり、リーダー的役割を果たした。

1854年22歳の時に Ellen Stebbins Curtiss と結婚し、2児一長男 D. Willis (1864) は9カ月で夭逝、二男 Arthur Curtiss (1867-1941) を儲ける。彼はまだ大企業家になる前の30才代から慈善事業に精を出し、半世紀にわたるニューヨークでの生涯の間、公に知られているよりもはるかに多くの貢献をした。様々な分野（「神から新聞配達少年まで」— Dr C. H. Parkhurst —）に関心を持ったので、彼の関係する慈善事業も広範囲に及

んだ。

晩年も Phelps, Dodge & Co. の古参社員として実業界で活躍する傍ら、60歳ごろ移り住んだニュー・ジャージー州マディソンにおいても慈善事業家としての役割を最後まで果たした。1907年ニュー・ハンプシャーのホテルで心臓発作に襲われ、ついに帰らぬ人となった。享年75歳。遺産4,000万ドルを遺した。その時、カナダ東部のラブラドルに探検ツアーに出ている息子アーサーは、父の臨終に立ち会うことはできなかった。

ニューヨークの住居は 40 East Thirty-ninth Street, New York City であった。

実業界での活躍

ニューヨーク市で最も著名な金属・輸出業者として、生涯 Phelps, Dodge & Co. と関係する。その他の役職としては、the Golden Hill Corporation and Southwestern Investment Company 社長。合衆国信託会社副社長。合衆国北部保証会社副社長。アリゾナ州の鉱山関係数社・南西部鉄道会社の理事等、数々の役職を歴任した。

教育支援及び慈善事業

彼の関係した教育支援および慈善事業の主なものは以下の通りである。

- ・児童援助団体 (the Children's Aid Society) 会長 (39年間理事、10年間会長)。メトロポリタン美術館後援者。アメリカ地理学会・アメリカ自然博物館理事。
- ・アーモスト大学理事 (息子アーサーがアーモスト大学学生時代から就任し、特に、同大学の日食観測研究所の設備・研究を支援)。
- ・ニューヨーク、ユニオン神学校理事 (当神学校の土地建物購入のために190万ドル寄付。当時、個人としては最高額) 等々。

ニュージャージー州マディソンとの関係

小村であったニュージャージー州マディソンも、南北戦争後、鉄道が通じ Borough of Madison に昇格する頃には、急速な発展を遂げ、ニューヨークの都会から資産家が多く移り住み豪邸が立つようになっていた。ジェームズ氏は60歳になった1892年頃、当地に別宅（country residence）を持ち、同市の偉大な後援者となる。

ジェームズ氏は1898年にはマディソン市のメイン・ストリートの西端にあった不潔な湿地を埋め立てて「ジェームズ公園」を作り、翌1899年にはロマネスク・ゴシック建築の公共図書館（James Public Library）を建築して町に寄贈した。また図書館の向かいに、クリーム色のレンガ造りのビジネスセンター（James Building）を建て地域の住民に商業や社交の場を提供した。全て住民にとって、地道な、役に立つ施設である。

彼のマディソン市への貢献は、そのようなハード面のものだけでなく、個人的な人道主義的な行為が目立たない形で数知れず行われた。例えば、アメリカに逃亡してきた極貧のユダヤ系ロシア人移民を何人も助けたり、あてのない行商人に彼の関係する会社の製品を融通してブリキ製品の行商人として身をたてることが出来るように計らったりした。

ジェームズ氏がマディソンに住むようになって15年も経たないうちに、彼の影響力は広く深く町中に浸透した。ジェームズ公園の竣工式では、市長はジェームズ氏を讃えて「彼の目的は人道主義的であり、彼の仕事は博愛主義的であり、彼の謙遜と寛大は比類のないものであります」（Frank J. Esposito *the Madison Heritage Trail the Madison Bicentennial Heritage Committee, Madison, New Jersey, 1985, p.155*）と公園に集まった千人以上の町民を前に語った。

彼は真の意味で博愛主義者であり、所有する財貨を必要とする人たちに惜しみなく与える生き方を選んだ人物である。

2、ジェームズ夫人について

生涯

Ellen Stebbins Curtiss James (1833-1916) は、ニューヨークで、Levi Guernsey Curtiss と Helen M. Couch の一人娘（父は彼女の少女時代に没）として生まれた。父の死後、エレンは母方の祖父サムエル・コーチに引き取られ、ニューヨークにある祖父の家とコネチカットにある祖父の農場で、少女時代のほとんどを過ごした。この時代にエレンの特徴となる稀なる性格は形作られた。しかし思慮深く豊かな祖父の愛も、エレンの寂しさを埋めることはできなかったかも知れない。

18歳までアメリカで学び、それから数年間は海外留学^{註8}をして、当時の著名な音楽教師の下で音楽家になる勉強をした。残念ながら後に徐々に難聴となり、音楽の道から身を引かねばならなくなったが、そのために、彼女の前向きで優しい心、クリスチャンとしての神に対する信頼、そして健全で揺らぐことのない精神が損なわれることは決してなかった。

1854年21歳のとき、新進気鋭のビジネスマン Daniel Willis James と結婚。彼も17歳で父を亡くしているので、相通ずる思いがあったのではないか。しかしながら、二人には前途に大きな悲しみが待ち受けていた。すなわち、結婚後10年で初めて授かった男の子 Daniel Willis James が1864年2月に生れて、その年の11月5日に天に召されたからである。何が原因でこんなに早く命を終えることになったかは不明だが、若い両親にとって、その時どれほどの試練であったかは想像できる。

アーサー・ジェームズの誕生

幸いにも、3年後の1867年には二男 Arthur Curtiss James が生れた。そして、アーサーは元気な若者に育ち名門アーモスト大学に入学。1896年彼が29歳になった時には、日本で皆既日食を観測するため、母校アーモスト

ト大学の天文学者トッド博士を自家用の快走艇（コロネット号）に乗せ、観測に必要な一切の設備を満載して、はるばる奥羽地方の白川関にまで送ることも出来た。

「大西洋より太平洋を斜めに横断して横浜に上陸し」（『同志社新報』第60号 1941.7.20）、到着後は同志社出身で、後に第七高等学校教授となる村上春太郎に任せて、自身は日本近海を心行くまで遊航し、日本の自然及び文化に対する憧憬を深めたそうである。夫妻にとって、世界の海を自由奔放に旅する息子の姿は、一方で危険を恐れつつも、元気であることに満足していたことだろう。

残念ながら、ジェームズ氏存命中の夫人の動向は表面に出て来ない。妻として母として家庭の中をきちんと切り盛りしていたのであろう。いわゆる社交界に出入りして、新聞紙上に名が出るような生活を好まなかったことは確かであるが、外での活躍の場として、教会活動があったのではないか。しかし出席していたかも知れない教会もまだ分かっていないので、ジェームズ夫人としての家庭外での姿に今回触れられないのは残念なことである。

1916年4月28日、ニューヨークの自宅で、肺炎のために死去した。年齢は82歳であった。

死亡記事によって明らかにされるジェームズ夫人の財産と慈善事業

ジェームズ夫人の死亡記事はニューヨーク・タイムズ紙上で2度掲載される。1度は死亡直後の1916年4月29日（28日死去）であり、2度目は約1週間後の5月5日である。

1度目の、死亡直後のものは、いわゆる死亡を報知するための記事である。女性でありながら死亡記事がニューヨーク・タイムズに掲載されることは、ある程度、彼女の生前の知名度を表わすものであろう。急なことな

ので、ここで言及されているのは、最初の寄付が第1長老教会（Old First Presbyterian Church）への18万ドルであったことと、以後の慈善活動の主たるものとして、夫の後を継いだ児童援助団体（CAS）にイタリア人のための学校を作ったことだけである。後は主に、ジェームズ氏の未亡人として、夫の死に伴い莫大な遺産を相続したことくらいである。

2度目の記事は法律事務所が、遺言に従って、遺産相続者にそれぞれの遺産金を分配したことを公表するものである。

新聞の見出しは「ジェームズ夫人 慈善事業に \$ 3,050,000を遺す」というもので、副題として受益者は教育者と聖職者であることが示され、それぞれの分配先が列記されている。

・まず3宗教団体に75万ドルずつ

- ① 長老派の牧師および未亡人で、障害のある人と、牧師の遺児救済のため
- ② メソヂスト監督派の教会で権利請求委員会（Board of Conference Claimants）のため
- ③ 会衆派の牧師救済委員会のため

・次は10万ドルずつ

- ① アメリカン・ボード
- ② 聖ロカ病院
- ③ 聖書協会の女性部
- ④ West 261st Street にある有色人種の孤児義捐協会
- ⑤ バージニア州ハンプトンにあるハンプトン師範学校と農業学校
- ⑥ 会衆派の女性宣教師支援協会

・次は息子アーサーに

ジェームズ夫人の住んでいた土地建物と、株券・債券など

・その他の家族に

ジェームズ夫人所有の宝石・貴金属類をメモ通りに分配

・ジェームズ夫人の義弟と、その子供たちに

義弟 James M. Stuart に 15万ドル、彼の子ども（男の子3人と女の子3人）に10万ドルずつ

・亡夫の秘書であった William W. Carman に25,000ドル

・ジェームズ夫人の付き添い Ellen T. Gould に25,000ドル

　　〃　　　　　馬車の御者に8,000ドル

　　〃　　　　　従僕（groom）に同額

ジェームズ未亡人となってからの彼女の慈善事業

ニューヨーク・タイムズ紙上に2度目に載った彼女の死亡記事の中で、遺産の分配先だけでなく、生前に行った彼女の慈善事業についても触れられている。

夫の没年（1907年）に彼女は夫の慈善事業に対する思いを継承し、貧しい人、困窮している人々に対して100万ドルを超す寄付をしたこと、以後も継続した慈善事業の中で一番よく知られているのは、1913年に行った寄付30万ドルであったことが挙げられている。それは、長年夫が会長を務めていた「児童援助団体」（CAS）に対するもので、目的は、ヘスター通りとエリザベス通りの交差する南西のコーナーに、イタリア人のための学校と社交のセンターを建てたことである。その学校では、イタリア人に対する職業訓練が行われ、一方、近隣で働く女性のための託児所も設けられた。そこには、シャワー付きの大きなジムが備えられ、日曜を除く毎晩、映画の上映が出来るホールもあった。ジェームズ夫人にとって、慈善事業の目的が単に箱ものを作るのではなく、それを使って、必要としている人たちに役立つどんなサービスを提供できるかであることが分かる。

彼女が寄付をする場合にこだわったことは、匿名であることと、人々に美しいもの、人々の品性を高めることに役立つものを目に見える形で遺す

ことであったと言える。その一つは、1914年から1915年にかけて、マディソン市が鉄道の高架駅を造る計画をしていたときに、彼女がとった行動である。駅の前のキング通りから大きくカーブした並木通りを作ることに最も熱心であった人たちの中心に彼女はいた。ある意味で町の顔となる新駅の正面を、混沌とした状態からすっきりと美しい形に代えて人々に示すことを目指したのである。その他のマディソン市内の道路に関しても、種々改良を加えて夫の遺したジェームズ公園に至るまでの道路を美しく整備した。(Madison Heritage Trail, p.155)

さらに駅舎のためにも巨額の寄付をした。その駅舎の外観は切り石をはじめ込んだレンガ造り、内部は檜の木の座席、レンガの壁と、大理石の切片をちりばめた床で出来て居り、1984年の「歴史登録建造物」(National Register of Historic Places) に登録されている。

Wellesley College への寄付

ウェルズリー大学への寄付の事実は、生前「匿名で」という条件であり公表されないままであったので、死亡記事の中では言及されていない。しかし、それは相当の額にのぼったはずである。彼女が亡くなる前、数年の間に、2度にわたってのことである。

それが明らかにされるのは、1917年、彼女の死後1年たったときである。その日は同大学の卒業式で、スピーカーに大学の支援者であり、ジェームズ家の秘書であった W.W. カルマン氏が招かれた。その日に初めて、ジェームズ夫人のウェルズリー大学に対する寄付の事実が皆の前に明らかにされ、それを記念する碑文(次頁図)が、タワー・コートの大ホールの美しい石造の暖炉に刻まれたのである。

1度目は1913年、同大学が「100万ドル基金」の募集を行ったときであったが、最初にその募金に応じたのがジェームズ夫人であり、10万ドル(募金総額の十分の1)の寄付であった。しかも、条件は匿名であること

であった。

2度目は2年後の1915年で、前年に大学ホールが火事で全焼した時のことである。大学はCollege Hall Hillの丘陵に、クウリッジ・アンド・カールトン設計事務所に依頼して、3棟の建物を新築する計画を立てた。ジェームズ夫人は、その内の2棟、タワー・コートとクラフィリンの建築費を寄付したのである。タワー・



コートというのは、元あった大学ホールにとって代わる、その後の大学を代表する建造物となるもの

タワー・コート大ホールの暖炉に刻まれた碑文（注10参照）

from the Archives of Wellesley College

であった。（次ページ写真参照）200人の寮生と10人の教員を収容でき、しかも最も完璧で最も美しい家具つきの建物である。建物はイギリスの古い大学のゴシック様式を取り入れた近代建築で、細部には古風な趣があり、装飾も豪華であった。この時の条件も匿名であることと、敷地は丘陵の周りで湖に面し方形の中庭を囲む建物であることだった。彼女の美意識とこだわりがここでも感じられる。

残念ながら、この建物は彼女の死後完成したので、それを見ることなくジェームズ夫人は神の許に召されたのである。

Wellesley College でのカルマン氏のスピーチ

1917年6月、ジェームズ夫人の死後1年以上たったウェルズリー大学の卒業式にカルマン氏は招待された。ジェームズ夫人について語るよう依頼されたのである。



ウェルズリー大学のタワー・コート
from the Archives of Wellesley College

カルマン氏はジェームズ氏の生存中からずっとジェームズ家に仕え、身近に夫妻の生き方を目の当たりにしてきた人物である。そのようなカルマン氏だからこそ語ることのできる言葉であった。それは格調の高い、聞く者の心を打つスピーチ^{注9}なので、全文を掲載したいが、紙面の都合で、数か所を選んで紹介する。

このたびジェームズ夫人の人柄について話をするようにとの依頼を受けました。その前にまずお断りして置かねばならないことは、私のいかなる言葉も、彼女の素晴らしいお人柄を伝えるには全く不十分だということです。

ジェームズ夫人のまろやかな精神・穏やかな気質・素晴らしい洞察力と理解力・豊かで寛容な信仰・気品のあるクリスチャン女性の持つ人格の広さ深さを十分にお伝えする力は、私にはありません。ジェー

ムズ夫人は女性の中でも最も優しく最も穏やかな方でいて、最も健全で最も強固な精神を持った方です。私はこれほどの女性を一人も知りません。

そして彼女が父を亡くし、幼時から祖父に育てられた経緯を語った後に

ジェームズ夫人はまれに見るユーモアのセンスの持ち主で、夫人と接触する全ての人に対して穏やかで親切に接されました。夫人は人としての思いやりにあふれ、かつ非常に寛大で気前のいい気質の方でしたので、神の王国のボーダーにまで手を伸ばして困っている人を救い出そうと絶えず探っておられる方でした。しかし、間違った行為に対しては、厳格で厳しさそのものでした。夫人の性格には、それが宗教に関することであれ政治に関することであれ、日常の行いであれ礼拝所に関することであれ、悪との妥協ということは一切あり得ませんでした。あらゆる悪に対して、彼女が代々受け継いで来たピュリタンの不寛容は、彼女の性格の著しい特徴でありました。

と続け、前にも触れた耳が不自由になるという試練ののち、大勢の人との交わりから遠ざかることはあっても、そのために彼女の優しさや精神が影響を受けることはなかったこと。ただ、世の進歩と向き合う際にこれまで以上に態度を固くする傾向はあったが、生来の素晴らしい精神と洞察力によって生涯を終えるまで心は生き生きし、世の中の大きな動きに対しては絶えず興味を持ち続けたことを語った。

ほとんど眼鏡の助けを借りることのなかった陽気な目、瞬時に信頼を勝ち取る優しくて女性らしい顔、白髪に代わることのなかった黒髪のままで、ジェームズ夫人は生涯の終りまで精神的にも肉体的にも元

気一杯でした。そして、夫人の性格の靈的価値は年齢が進むにつれて、ますます明らかに、ますます確かになりました

と述べて、最後に、この美しい建物が歳月の荒廃をものともせず、気品と簡素を合わせ持つ彼女の気質の記念碑として、また、中に住まいする女性たちが必要とする温もりと陽気さを守る避難所として、ここに立ち続けることが私の願いであると語った。さらに彼女の性格を余すところなく伝えている、今日ここに据え付けられた記念碑の文を通してタワー・コート^{註10}の住人全てが、彼女の柔和な精神と献身の心を感得し、彼女のなした良き業がいついつまでも受け継がれていくことを信じている、と締めくくったのである。

おわりに

同志社女学校は1876年に、女子の普通教育機関として始まった。しかし普通部の充実発展とともに、次第に高等教育の整備が望まれ、1910年頃には具体的に文部省認可の女子の高等教育機関設立の手續きに取りかかっていた。その折に、不可欠の資金10万ドルという巨額の寄付の寄贈者となったのが、ジェームズ夫人と息子のアーサー・ジェームズ氏であった。まさにジェームズ母子は同志社女学校が女子の高等教育機関としてスタートするのに、なくてはならない恩人であったと言える。

これまで同志社女子大学は、二人の寄付金によって建築が可能となったジェームズ館を、建物としては確かに大切にきて来た。しかしながら、その名前の元となる寄付者のことは知られないままで現在に至っていた。

息子のアーサー・ジェームズ夫妻には、ジェームズ館落成数年後の1922年に来日の機会があったので、女学校に招き、ジェームズ館前で歓迎感謝会を催し、同志社男女学生職員列席の上、記念撮影をすることも出来た。

（『期報』47号 p.85）しかしながら、ジェームズ館竣工の1年後に死去したジェームズ夫人に関しては、死亡記事が『期報』に載ることもなかった。今回初めて生没年が分かり、彼女の生涯・人となり・業績を跡付けることができ、「建造物であるジェームズ館」と「その寄贈者ジェームズ夫人」とを結びつけて、思いを巡らす機会が与えられたことは、遅すぎたとはいえ、良かったと安堵している。肖像画が見つかったことも僥倖であった。

今回の調査から、彼女が同志社女学校やウェルズリー大学に巨額の寄付をしたのは、亡くなる前の数年、彼女が78歳から83歳の間の出来事であったことが判明した。また両校とも、彼女の寄付のお蔭で建った建物が、今なお大学を代表する建物、大学の風格を表象する建物となっていることも分かった。それはジェームズ夫人の生きた生涯そのものであり、長年の秘書カルマン氏の言葉通り「気品と簡素を合わせ持つ彼女の気質の記念碑として立ち続け」ているのである。

かつて同志社女子専門学校の校長であった松田道は、『期報』38号（1916年3月）に「近頃の感想」と題して、以下の文章を書き残している。

校内煉瓦の新築整然として立ち、(中略)庭園は広く草花樹木にも富み、而して一点の虚飾なきところ何となく古来の同志社精神を髣髴たらしめて我等は死する迄同志社女学校のために尽さんとの念を自然に堅からしむ。(中略)互ひに刻苦勉励して巍々たる建物に対し以て恥づる勿らしめよ (pp.41-42)。

同志社女子大学が創立125周年記念事業として、ジェームズ館の修理復元をしたことは、本当に意味あることであった。私たちは、これからも一層ジェームズ館を大切にするとともに、「建物に対して恥ずることのないように」、勉学と人格の陶冶に励もうではないか。そして、ウェルズリー大学がしたように、ジェームズ館の内部に、ジェームズ夫人に対する感謝

の念を、何らかの形で、遺すべきではないのか。

注

注1 Paul Secord氏 パサデナ歴史博物館のアーキビスト。ジェームズ夫妻の写真の在りか (Image of America シリーズの *Madison* 誌上) を探し出すと共に、特に夫人の家系について調査し、かつ、夫妻の死亡に関する新聞記事を送ってくださった。(参考資料参照)

Daria D' Arienzo氏 元アーモスト大学図書館アーキビスト。Wilna Slight氏を通して、ウェルズリー大学にあったジェームズ夫人関係の資料を入手して下さった。(参考資料参照)

注2 Frances Benton Clapp *Mary Florence Denton and the Doshisha* (Doshisha Univ. Press, 1955) の翻訳。2007年、デントン生誕150年記念行事の一つとして同志社同窓会が企画し、同志社女子大学・同志社同窓会により出版。クラブによる伝記なので、第1次資料とは言えないが、デントンの死後、一番早い時期に書かれ、当時残存していた書簡などを多用しているので、信憑性が高いこと、現在でもこの著を超えるデントン伝は出ていないことなどを勘案して、出来るだけ引用した。

注3 アメリカ最古の海外伝道局アメリカン・ボードと協力して活動を開始した女性の団体。創立はアメリカン・ボードに比べて60年遅い1868年であるが、教派別女性団体としては、アメリカで最初であった。始めは、ボストンを中心にしたウーマンズ・ボードだけであったが、海外伝道の拡張とともに女性の運動としてアメリカ中に広まり、1869年には中部ウーマンズ・ボード、1873年には太平洋ウーマンズ・ボードと3団体に分かれて活動した。3団体とも、主として海外派遣女性宣教師を支える事業に携わったが、後の同志社女学校との関係でいえば、太平洋ウーマンズ・ボードが最も長くかつ強力で支援を続けた。

注4 この「常磐寮」は、1927年以降に建てられる常盤寮（東館・西館）とは異なる建物のことである。

注5 実際には、寄宿舎前の平安義会所有地500坪は、最初は借地の形でしか契約できず、1934年の理事会で初めて購入計画が議され、購入が可能となった。

注6 ジェームズ夫人の同志社女学校への寄付総額が、約73,000ドルになるとする、この私算は初めての試算である。これまではジェームズ夫人の寄付として区別して評価されてこなかったのが、その主たる理由である。

しかし、ジェームズ夫人が1909年に、平安寮新築のために、最初に女学校にした寄付、およびアーサー・ジェームズ氏と連名でジェームズ館のためにした10万ドルの寄付は、D. ウィリス・ジェームズ氏が1907年9月13日に亡くなり、兩人

が共に莫大な遺産相続をした後のことであり、ジェームズ夫人も相当の資産家となっていた。(ジェームズ氏死亡時に遺した資産は4000万ドルであった。New York Times 1907.9.14) それのみならず、夫の没後、夫人はジェームズ氏の慈善事業に対する精神をしっかりと受け継いだ女性であった。それ故、カルマン氏が言うように、ジェームズ夫人の寄付は、息子のアーサー・ジェームズ氏による寄付とは、区別されるべきなのである。

しかしながら、1941年、アーサー・ジェームズ氏の逝去に際し、中瀬古六郎が『同志社新報』誌上に寄せた、「A.C. ジェームズ氏を弔す」の弔文の中で、同志社女学校への最初の寄付は名目上、母堂であったとしているのは、今回の調査からも、事実と異なる。(下線坂本)

また、『同志社五十年史』の中で、ジェームズ一家の寄付金に触れているのが、「女学校同窓会」の章であるのもおかしなことだが、「紐育ジェームズ氏母堂」の寄付金と特定しているのは、新平安寮のための9,720円54銭のみである。

さすがに、ジェームズ館の米貨10万ドルに関しては、「ジェームズ夫人と子息エー・シー・ジェームズ氏の連署による寄付」と記述されているが、その後は、「ジェームズ氏其後の寄付金」という項目でまとめられている。

以後の、すべての寄付金をアーサー・ジェームズ氏によるもの、とされているところに異議を挟みたい気持ちに変わりはないが、同志社の年史の中で『同志社五十年史』のみが、ジェームズ一家の同志社への寄付総額を数字を挙げて記録しているのは貴重なことである。ここに転記しておく。

一金	12,040円	大正 2 年	女学校建築及設備費
一金	2,005円	同年	女学校常盤寮修繕費
一金	48,363円	同年	同志社土地購入
一金	22,157円	大正 3 年	家政館建築、其他土地購入
一金	9,615円	大正 7 年	女学校増築及び修繕費
小計	94,180円		

この数字の後に、「之に平安寮や立志館、ジェームズ館等の建築資金及び女学校基本金として寄付された分を合算すれば、総合計額実に金325766円で、過去の同志社55年の歴史中一人で斯の如く多大の寄付金を送られた人は外にはない。況んや、ジェームズ氏は近く実現されんとする同志社内アマースト大学記念館にも、既に莫大な寄付を申し込んで居られるではないか」(『同志社五十年史』411ページ下線坂本)と締めくくられているが、私算の約73,000ドルよりもはるかに多額の寄付が女子部にされていることと、それを差し引いて、さらに膨大な額が同志社

に寄付されていることを、同志社はきちんと評価しないとイケないのではないか、とつくづく思う。

注7 参考資料の中の英文資料に基づく

注8 カルマン氏のスピーチの中では 'go abroad' として特別な国には言及されていないが、もちろんヨーロッパであり、私はイギリスが最も印象深かったのではないかと推測する。

なぜなら、彼女が最晩年にウェルズリー大学に寄贈したタワー・コートの建築様式として希望したのは「イギリスの古い大学のごシック様式を取り入れた」ものであったし、21歳で夫との結婚を決断する際に、イギリスで生まれ17年間育ったというジェームズ氏の半生涯に共通の体験を重ねたためと考えることもできるからである。また、1864年に長男を亡くしたあと、心の傷をいやすために夫妻でイギリス旅行をしていることもパスポートの記録から判明している。

注9 Wellesley College Materials の中の Mr. W. W. Carman's Remarks, Commencement 1917

注10 碑文は以下の通りである。

“With honour and gratitude Wellesley College cherishes the name of Ellen Stebbins James whose sympathy with the ideal of the founders of the College and generous interest in the high tasks of scholarship are expressed in enduring form in the gift of this building for the service of learning and the Greater Glory of God.”

参考資料

『同志社五十年史』 同志社校友会 1930年

『同志社女学校期報』 同志社女学校・同窓会 1910-1922年

『同志社百年史』 通史編一 同志社 1979年

『同志社女子大学125年』 同志社女子大学 2000年

『同志社新報』 第60号 1941年7月20日

『ミス・デントン——「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年——』 F.B. クラップ 著・『ミス・デントン』 翻訳委員会 同志社女子大学・同志社同窓会 2007年

Frank J. Esposito *The Madison Heritage Trail* The Madison Bicentennial Heritage Committee, Madison, New Jersey 1985

John T. Cunningham *Madison* (Images of America Series) Arcadia Publishing 2004

Wellesley College Materials:

Wellesley College News No. 34 1917.6.21

Record of the Trust Funds of Wellesley College 1940.6

Ellen Stebbins James Fund

Mr W.W.Carman's Remarks at the unveiling of the memorial Tablet in the Great Hall of Tower Courts, Commencement, 1917

New York Times:

"D.Willis James Dying" 1907.9.12

"D.Willis James Dies in New Hampshire" 1907.9.14

"Mrs E.S.C.James Dead" 1916.4.29

"Mrs James Leaves Charity \$3,050,000" 1916.5.6

Paul Secord: Curtiss Family History Report